

プロ野球ファンの野次
—大阪弁による事例—

長岡 壽 男*

大阪青山学園理事

Yells heard from the stand of Japanese professional baseball games
— Examples spoken in Osaka dialects—

Hisao NAGAOKA

Osaka Aoyama Gakuen

Summary The number of professional baseball fans in Japan has greatly increased by the following three reasons: 1) Japanese professional baseball teams have recently become quite strong and competitive internationally; 2) uniquely Japanese baseball culture has permeated throughout Japan; and 3) each professional baseball team has its own home baseball stadium where the players receive enthusiastic support from their fans in the stand. These reasons worked synergistically to give rise to vigorous and loud yelling from the stand in every ball game.

Local fan's yelling necessarily reflects each local dialect. In the present paper, the author attempted to collect and survey yelling words spoken in Osaka dialects by spectators in the stand of baseball stadiums in Kansai areas. These yells were categorized according to the purpose of yelling, and their words were evaluated to demonstrate how effectively those dialectal expressions were utilized.

Yelling in baseball games plays an important role to enkindle the atmosphere of a baseball game. On the other hand, there is also a problem of inappropriateness arising from careless usage of unsuitable expressions in a yell. Inappropriate yells should be minimized to keep other fellow-fans' ball game watching pleasant.

Keywords: professional baseball, fan, support, yelling, Osaka dialect
プロ野球、ファン、応援、野次、大阪弁

1. はじめに

プロ野球が今日のように隆盛を続け、国民的スポーツとして多くのファンを有するようになったのは、第二次大戦の終結以降のことである。因みに、わが国には、明治時代初期に、野球が持ち込まれている¹⁾。文明開化を志す人々によって、欧米の文化を積極的に取り込む過程で、お雇い外国人²⁾により、高等教育機関に持ち込まれたのが、その初めとなっている。旧制第一高等学校では、早くから野球に取り組み、他校との試合を重ねた。また、同校が横浜の米国居留民チー

ムと試合をしたのが、日本における野球に関する国際試合の最初とされている³⁾。立教や明治学院などのミッション・スクールでも、米国人教師により早くから野球が取り入れられた。慶応や早稲田も野球に力をいれて、その後、両者の間で対抗戦が行われるようになった⁴⁾。さらに、大正4年(1915年)、中等学校を対象とする全国中等学校優勝野球大会が、豊中球場で始められた⁵⁾。この大会は、現在の甲子園で開かれる全国高等学校野球選手権大会に繋がっている。このように、戦前、旧制高等専門学校や旧制中等学校において、盛んになった野球ではあるが、プロ野球の前身と

*Email: hisao@sakura.zaq.jp
〒562-8580 箕面市新稲2-11-1

しての職業野球⁶⁾は、当時人気のあるスポーツではなく、今日のように毎試合、多くの観客を集める状況とは雲泥の差があった。

また、第二次世界大戦の拡大とともに、学生野球は試合が禁止され、職業野球団も解散させられた。職業野球チームに所属した選手の多くは兵役に取られ、学生野球の花形選手達もまた学徒動員により戦場に送られた。この頃は、野球そのものが世の中から消し去られた時代であった⁷⁾。

1945年わが国は、ポツダム宣言を受託し、無条件降伏により終戦を迎えた。大都市の多くは既に灰燼に帰し、それに加えて終戦直前には、広島、長崎に原子爆弾が投下された。終戦により平和を迎えたとはいえ、人々の生活は、衣食住ともに困窮極まりない悲惨な時代であった。このような状況から、復興の第一歩が始まっている。戦時中抑制されてきた米国など先進国の大衆文化が、この時期一気に入り込んできた。ジャズ⁸⁾、カントリー・ウェスタン⁹⁾、ハワイアン音楽¹⁰⁾、ダンス（とくにジルバやマンボ）などが、若者を中心に一気に広まった。この時期、野球も解禁されて、手作りの道具を使用して、各地で草野球が盛んになった。進駐軍との親善試合も行われるようになり¹¹⁾、広っぱや狭い道路でも、子どもたちの間で野球が繰り広げられた。

連合軍（進駐軍）は、戦争中に軍国主義に加担した財閥の解体を行い、地主から農民を解放し（農地解放）、さらに戦争責任者の追及を進めた。一方、労働組合活動には理解を示したほか、婦人の参政権を認めるなど、この時期、民主化の推進を積極的に進めている。このなかで戦争中禁じられていた野球が、何の遠慮もなく楽しめるようになり、人々の心に明るい話題を投げかけるようになった。具体的には、学生野球や中学校野球の復活であり、プロ野球団の再結成が進められた。大戦中に、元職業野球選手や学生野球の有名選手が多数戦死した。しかし、無事に帰還した元選手達が、次々にプロ野球界に復帰してきた。その中には、赤バットの川上哲治、青バットの大下弘、長尺バットの藤村富美男選手などがいた。また、「最後の早慶戦¹²⁾」を経て戦地に赴き、無事帰還した当時の学生たちのなかからも、別当薫、笠原和夫選手などがプロ入りしてきた。さらに投手ではヴィクトル・スタルヒン、若林忠志、別所毅彦選手などが復帰後活躍した。こうした選手は、戦後における復興期の少年ファンの憧れの的となった。彼らの後に、長嶋茂雄、王貞治、張本勲、金田正一、野村克也、杉浦忠、稲尾和久選手などが続き、

プロ野球は今日の隆盛に繋がっていったといえる。

現在のプロ野球の観客動員数は、年間2千万人¹³⁾を悠に超えており、人気のあるサッカーなど他のスポーツと比較しても、圧倒的に群を抜いた観客動員数を誇っている。このように戦後発展してきたプロ野球とともに、野球の大衆化が進んだといえる。熱心なファンの応援とともに、ゲームの成り行きに熱中したファンのなかから、思わず口について出る野次について、本稿では実態の把握を試みる。

プロ野球の野次は、①ゲームの局面や進行に応じて、ファンが感じたままを利根のかつ声高に発する言葉であり、文章に記したものではないこと、②野次を発する人の責任の所在が不明確であること、③ユーモアに富んだ観衆を和ます表現もあるが、一般に罵詈や他の語句と結びつけて、怒鳴り上げるものが多い。つまり、低俗または品位に欠ける言葉が用いられていること、④球場の立地する地域の方言に依存しており、総合的に捉えることは困難であることなどから、これまで、研究や調査の対象になりにくいところがあった。

「野次る」ことについて、広辞苑では、「人の言動をひやかし嘲弄して妨げる。また、一方を応援するために他方の言動を嘲笑して妨害する」とある。野球の現場で、どのような野次が発せられているのか、具体例をもとに分析してみる。

なお、上述のように、野次は、各球団の所在する地域の方言に左右されるが、本稿では、関西地方の球団を応援する人たちによる、大阪弁による野次を取り上げて考察する。ここでの大阪弁とは、大阪に限ってしゃべられている方言というよりも、大阪近辺、たとえば兵庫、奈良、京都などを含む広い地域の人々が、聞いて容易に理解できる言葉のことである。この野次に用いられる言葉は、大阪近辺在住の人たちが、普遍的に日常使用している言葉ではないことも付言しておきたい。

大阪弁については、牧村史陽¹⁴⁾を参照した。また、大阪弁の良さや特徴について、田辺聖子(1978)、(1993)や大谷晃一(1997-a)、(1997-b)そして尾上圭介(2010)も参考にした¹⁵⁾。なお、大阪弁以外の野次についての調査は、今後の課題としたい。

本稿の構成は、次節で、日本のプロ野球の発展要因を考察し、こうした要因と野次とのかかわりについて説明する。3節では、大阪弁による野次の実態を把握し、併せて、用いられている大阪弁について整理する。このことから、大阪弁による野次の特徴や、その含む意味についても考察する。4節では、むすびにかえて

本稿をまとめる。

2. 日本のプロ野球の発展と野次

日本のプロ野球が、今日のように発展した過程は、必ずしも平坦な道ではなかった。第二次大戦中は、野球そのものが「敵国において起源とするスポーツ」であり、ルールや競技で英語を用いることから、敵国の言葉の使用禁止するという時期があった。その後、上述のとおり、野球をすること自体が禁止された。現在の状況から想うと隔世の感がする。

こうした時代を経て、今日のようにプロ野球が、国民多数から愛され、親しまれるスポーツになったのは、いくつかの理由が挙げられる。ここでは主要な3点について取り上げる。

① 日本のプロ野球が国際的に見ても力量が上がり、人々の関心を一層惹きつけた事。

1934年(昭和9年)ベーブ・ルースなどの大リーガーが来日し、日本の職業野球を代表するチームと試合を行っているが、全く歯が立たないほど、力量に差があった¹⁶⁾。唯一評価された出来事は、当時の澤村栄治投手が好投したことである。また、1949年、オドール監督の率いるサンフランシスコ・シールズ軍が来日し¹⁷⁾、親善野球を行った。しかし、3A(トリプルA、大リーグ系列のマイナー・リーグでも、一番上位にある)所属のチームであっても、当時の日本チームは勝つ事が出来なかった。

ところが最近では、2012年春季キャンプを終えて来日した大リーグ2チーム(マリナーズ、アスレックス)と、巨人・阪神がそれぞれ練習試合を行ったが、互角ともいえる戦いをしている。このことは、既に日本のプロ野球チームが、大リーグ所属球団に対して、対等に戦えるほどの力をつけてきたことを示している。米国大リーグには、これまで野茂英雄投手を先鞭として、イチロー、松井秀喜、松坂大輔、ダルビッシュ有、黒田博樹などの選手が移籍して、それぞれ実績を上げてきた経緯がある(ただし、元南海で活躍した村上雅則投手は、野茂英雄選手より以前に大リーグで出場していた)。日本選手が活躍すれば、日本選手の大リーグ移籍の流れは、今後とも進むものと考えられる。

また、ワールド・ベースボール・クラシック(World Baseball Classic: WBC)において、2006年、2009年

と日本が連続優勝した。このことも、わが国の野球の実力を、世界に示した事例といえる。

日本の野球が、今や米国の水準に近づきつつある理由には、①選手各人が、体力に適った、高い技術を習得していること、②選手一人ひとりが、持ち場や役割を的確にこなす全員野球が徹底されていること、③戦略面において、日本独特の緻密な野球が繰り返される事などがあげられる。

たとえば、米国の野球と比較すると、米国はパワー野球が尊ばれ、選手個人の独創的かつ豪快・華麗なプレーがファンを惹きつける。しかし、逆に、大味な野球を見せ付けられる事もある。米国の野球は、チーム・プレーを優先させる日本の野球と対極にあるといえる。

このように、日本のプロ野球が力をつけてきたことにより、野球ファンを惹きつけた結果、観客動員につながってきたといえる(最近では、「なでしこジャパン」がワールド・カップ(優勝)やオリンピック(銀メダル)で活躍したことから、女子サッカーの人气が急上昇している事例がある)。この結果、多くの観衆が集うことから、相互に気分が盛り上がり、盛んに野次が発せられるようになってきた。

② 野球を愛する人たちが増えて、日本独特の野球文化が定着しつつある事。

日本に野球が輸入されて約150年になる。ベースボールを正岡子規や中馬庚が野球と訳したとされている¹⁸⁾。それ以来、野球用語は、適時日本語に訳されるか、日本独自の和製英語が用いられるようになった。また、第二次大戦中、英語に代えて、和製の野球用語が使用された事もあった¹⁹⁾。こうした経過を経て、現在に至ってはいるが、日本独特の用語が、最早、全く違和感もなく普通に用いられているものがある。例えば、ナイトゲーム(night game)、トンネル(let the grounder go through one's legs)、ポテンヒット(Texas leaguer's hit)、フォアボール(take a walk)、ゴロ(grounder)、ランニングホームラン(inside-the-park homer's)、アベックホームラン(back-to-back homer's)などが挙げられる(和製野球用語と英語による野球用語の対比は、表1を参照されたい)。

表1 野球用語の日米比較

和製英語	(日本語)	英語 (米語)
インコース、アウトコース		inside corner, in, outside corner
ウェストボール		waste pitch, garbage pitch
オーバースロー	(上手投げ)	overhand pitch
サイドスロー	(横手投げ)	sidearm pitch
スピードボール	(速球)	fastball, fireball
デッドボール	(死球)	hit by a pitch, hit-by-pitch
ノーコン		bad control, lack of control
バッティングピッチャー (打撃練習用投手)		batting practice pitcher
フォアボール	(四球)	take a walk, walk, free pass
アベックホームラン「仏語と英語の合成語」		back-to-back homers
イージーフライ		routine fly
エンタイトルツーベースヒット		ground-rule double
ゴロ		grounder, ground ball, roller, hopper
ピッチャーゴロ		come backer, grounder to the pitcher
トスバッティング、グリップエンド		pepper, knob
トップバッター	(1番打者)	leadoff man
ノック、シートノック		fungo, fielding practice
ファーストフライ	(一塁フライ)	fly ball to first
ポテンヒット		Texas leaguer's hit, blooper
ライトオーバー		over the right fielder
ランニングホームラン		inside the park homer
イレギュラー		bad hop, nasty hop
キャッチボール		catch
クッションボール		carom
シングルキャッチ	(片手捕球)	one-handed catch
タッチアウト		tagging out
トンネル		let(the grounder)go through one's legs
さよならヒット		winning hit, game-ending hit
バックホーム	(本塁送球)	throw to the plate
ベースカバー		cover(ing) a base
タッチアップ		tag(ging) up
フルベース	(満塁)	bases full, bases loaded
ヘッドスライディング		headfirst sliding
ホームイン	(生還)	cross home, come in
ホームスチール	(本盗)	steal home
ゲッツー	(重殺)	double play, get two persons out at one time
ファーストミット		first baseman's glove
レガース	(脛当)	leg guards
オープンゲーム	(練習試合)	exhibition game, pre-season game
グラントボーイ		bat boy
ゲームセット	(試合終了)	Game! the game is over
サイン	(サイン帳への) サイン	signal, autograph
シーズンオフ		off season
ショート	(遊撃手)	shortstop
ファースト	(一塁手)	first baseman
ライト	(右翼手)	right fielder
ナイター	(夜間試合)	night game
ネクストバッターサークル		on-deck circle
バックネット、バックスクリーン		backstop, centerfield screen
ファールグラウンド		foul territory
マネージャー	(主務) 注: 監督 (総監督)	team's caretaker field manager, (general manager)
スリーバント		two-strike bunt
セーフティバント		drag bunt, base hit bunt

注: 黒川省三、植田彰 (1998) 『こんなに違う日米野球用語小辞典』 洋販出版、玉木正之 (1988) 『プロ野球の友』 新潮文庫 pp.154-165 を参照し、作成。

第二次大戦の終結後、厳しい生活を強いられた人々に潤いを与えるためにも、連合軍は野球の普及に力を入れた節がある。戦後、程なく中等学校野球が復活し、学生野球も人気を取り戻したが、なかでもプロ野球の再興は目を見張るものがあった。こうした時代背景の中で、野球をする人たちが、急速に増えてきたこと、いわゆる野球の大衆化が進んだことは注目される。

老いも若きも野球を愛するようになり、野球にかかる話題に事欠かない時代に入ってきた。野球放送からテレビ放映、一般紙のスポーツ記事やスポーツ新聞が、人々の生活の中に何の抵抗もなく受け入れられている。また、ファンの間では、数々の名場面や、スター物語が語り継がれるようになった²⁰⁾。しかも、世間では野球小説²¹⁾や、野球に関するノンフィクションが広く読まれている。これらの中には、直木賞受賞作家による小説もいくつかある²²⁾。このほか、過去の野球に関する思い出を、いつまでも大事にする心意気を伝える作品などもある²³⁾。さらに、甲子園に拘わる書物には、枚挙に暇がない²⁴⁾。

思い起こすと、昭和20～30年代には、プロ野球選手のプロマイド(bromide)を、子どもたちが集めた時期があった。お菓子を買うと、「おまけ」でプロマイドをくれるものである。当時の少年があこがれた選手のプロマイドを集めるために、駄菓子屋に足を運んだ人も多いと思われる。現代においても、それに代わるものが多々あり、また、応援グッズにも、多様なものがある。野球にまつわる関心が、子どもたちの日常生活の中でも、育まれてきたことは、プロ野球にとっても、心強いことであった。

このように日本の野球の発展とともに、日本独特の野球文化が生まれて、人々の生活に深い関わりを持つようになってきた。大衆が野球をよく知るようになり、このことが野次につながっていると見える。

③ 活発な応援が、観客にとって魅力となっている事。

野球が人気を得て、プロ野球の応援は私設応援団を中心に、賑やかなものとなっている。試合開始前から、エールの交換が始まるが、試合が始まると、攻撃側になった球団ファンが、交互に応援を繰り広げる。私設応援団のリードのもとに、トランペットを吹き鳴らし、打席に入った選手にヒッティング・マーチで応援する。チャンスが来れば、これに合わせた応援歌を歌い、応援団は一層盛り上がる。こうした応援スタイルが基本的に1回から最終回まで、延々と続くことになる。

偶に観戦にやって来たファンも、応援団リーダーの

指揮に唱和して、一緒に手をたたき、声援を送る事になる。味方チームがチャンスともなれば、ファン全員が盛り上がり、喜びは頂点に達する。このように今日のプロ野球では、その日の観客全員が、応援団の指揮に合わせて応援する雰囲気になっており、偶にしか球場に来ない人々も、これに加わり満ち足りた気分になる事になる。

ところで、応援団やファン・クラブに加入している人たちには、「理屈抜きに好きな球団や選手を応援し、選手と一体になって戦うことにより、勝利に導くために球場に来る」という。このほか、「自らの生活において、ストレスからの解放や世間の煩わしさからの忘却」とか、「応援する人たちとの仲間意識の醸成」等で球場に集まる人もいる。この人たちが、球場で上着を脱ぎ、ネクタイを外し、揃いのTシャツに着替えて、応援グッズを手に応援するのが、一つのパターンとなっている。なお、彼らの口から、発せられるのは声援ばかりではない。試合の場面に応じて発せられる野次がある。応援団の声援は、リーダーによる統制の取れた形で行われるが、野次は、試合の展開過程で、アド・リブ(ad libitum)的に観衆の中から発せられる。

このように、①日本のプロ野球が急速に力を発揮するようになり、ファン心理をひきつける事に繋がったこと、②野球文化が人々の生活に浸透してきたこと(用語、TV・ラジオ・新聞などの報道、用具・応援のための野球グッズ、小説・エッセイなど野球にかかる文学などに見られる)③球場における応援が活発になり、多くの観客が試合の展開に一喜一憂する雰囲気が醸成されつつあることなどが、相互に作用する事態になり、観戦しているファンの野次も盛んに発せられるようになってきた。

3. ファンの発する野次

3-1 野次の実態

野次の実態を調べると、単に相手チームを罵倒するだけでなく、ふがない味方を罵倒することもある。試合の進行場面に応じて、タイミングの良い野次もあれば、まるで憎い敵であるかのごとく、執拗に特定の選手を標的にして野次する場合もある。味方が一方的にリードしている状況では、いわゆる「ドンチャン騒ぎ」になり全員が浮かれている。しかし、逆の場合は、味方選手への風当たりが強くなる。あきらめムードになれば、愚痴をこぼす場面が多くなる。したがって、野

次は、その試合の流れによって内容がそれぞれ異なることになる。

なお、野次は、本拠地のある地域の方言に左右される。たとえば、ナゴヤドーム球場、マツダ・スタジアム（広島）、ヤフオクドーム球場（福岡）などでは、その地域の方言が用いられることから、それぞれ特徴のある表現になる。本稿では、大阪弁による野次を中心に集めたものである。

ゲームの展開に合わせて、その都度発せられる野次のなかから、特徴的なものを以下に取り上げてみた（ただし、文章表現には不適切なものや、品位に著しく欠ける野次については、除外している）。

たとえば、相手チームを罵倒するケースとして、次のようなものがある。

① 相手投手が、味方の選手に死球を与えた場合に；
「コラ！ドアホ！何サラシトンネン。オイ、(選手名)！後でワイトコへ来い。ボカボカニイワシタルヨッテニナ、覚エトケヨ！」と味方の選手の具合を心配するよりも、まず相手投手を威圧している。

② 4番打者を敬遠する相手投手に対して；
「オイ(相手投手名)！ウチの4番に野球ヤラサヘンつもりか！お前、もう野球センデエエから、早よニサラセ、エエナ！」と鬱憤をぶちまけている。

③ ファウル・ボールを、自分たちの応援団席に打ち込んだ相手選手に対して；
「コラ！何処打ットンネン！前へ打タンカ！オマエ、ウチの選手が、みんな手開けて待ットルヤナイカ、ボケ！話の分カラン奴ヤナア、お前は」と相手選手のファウルに対して、怒りをぶつけている。

しかし、相手選手を罵倒するばかりでなく、味方の不甲斐なさに、相手側に手加減を懇請する場面もある。

① 「コナイムチャムチャ打たれたら、ドナイモコナイモ成リマヘンワ。エエ加減ニシテホシイワ。この辺でカンニンシタッテーナ！(相手側の監督)さん！」と、相手に対して手を抜いてほしいと頼んでいる。

② また、相手チームが大量得点でリードしているため、まるで「お祭り騒ぎ」の相手応援団に対して；
「(相手球団名)の応援団さん！モウチョット上品に出来マヘンカ？何ヤッタラ、ワイラが応援の仕方教えマッセ！ドウデッカ！」と、どちらが上品か分からないが、下手から申し出を行って、相手応援団を牽制している。

次に、応援するチームを激励または発奮させるケースに以下のものがある。

① 味方の選手がエラーした時；

「オイオイ！（選手名）！アンジョウヤッタレヤ！投手が可愛そうヤナイカ。後で、打って返しヤ！エエカ！」とこの段階では、やんわりと奮起を促している。大阪弁のいいところかもしれない。もし、これが関東の球場での、ファンであれば、「オイ、オイ、何してんだよう！しっかりしろよ！」という事になる。

② しかし、もし、続いてエラーした場合は；
「コラ！何サラシトンネン。お前のお陰で、この試合「パー！」ニナッテシマウガナ。ドナイカセエヨ、お前！」と今度は、厳しく奮起を促すことになる。

③ また、外人選手にも激励が飛ぶ、「オイ、(外人選手名)ドカント一発カマシタレヨ！」と叫ぶが、本人の反応が無いため、「コラお前、日本語分ットンノカ？ノンビリシテル場合ヤナイデエ！」と念を押している愉快な野次もある。

④ 試合が競ってくると、何でも出塁しろという意味で；

「当たれ！当たれ！ボール逃げトツテ、お前の出番ナイヤナイカ！デッド・ボールで行け！エエナ！」と決死の覚悟を要求する野次もある。

ところで、期待していた味方選手が見事にヒットやホームランを打つと、「オオキニ、オオキニ、お前エエトコアルヤナイカ、男前ヤ！最高ヤ！」と喜びは最高潮に達する。なかには感激のあまり、涙ぐんでいるファンもいる。これは、野次というより歓声や喜びの絶叫に近い。

さらに、「アア、エエ日に来た！今日はエエ気持ちヤ！最後に歌ウトテ、一杯飲んで帰エローヤ！」と仲間といつまでも盛り上がっているのは、勝ち試合の場合である。

一方、試合の展開により、応援しているチームの不甲斐無さを、なじるケースもある。

① ファンのチームがいいところなく、一方的に劣勢にあるとき、「コラ！エエ加減にセーヨ！コナイ弱かったらドナイモコナイモ、シャーナイヤナイカ！神も仏もオマッカイナ。ワヤヤナア、ホンマニ！」と味方チームの奮起を促しながら、愚痴が入る。

② また、味方の選手に対しても、「シッカリ、セーヨ！お前らコンナヘボデモ、ゴツツイコト年俸モウテルヤロ！ワイラ入場料払ロテンネンゾ、分カッテルヤロナ！必死のパッチ(語呂合わせの言葉)で行けや！」とやけくそな応援になる。

このほか、味方球団の不利にならないように、中立の立場にある審判に要請するというケースもある。

① 味方に対して厳しい審判の判定が下された場合；

「(審判名)さん!今ノン、チョト厳しいノンとチャイマッカ?あれがストライクやったら、誰が打テマンネン!ソコントコ、シッカリ見タッテーナ!タノンマッセ!ホンマ」と、遠慮しながら、味方の不利にならないように、懇願している。

② 味方の選手が盗塁を試みたが、間一髪アウトと判定されて;

「ナンヤソレ!何がアウトヤネン!下から足が先に入るとるヤナイケ!審判の立つ位置おかしいノントチャウカ?ここからはチャント見えとったヤナイケ!エエ加減ニセーヨ!」と判定を野次っている。

このような事例から、野次は、①相手選手を罵倒するもの、②相手に手心を期待するもの、③味方選手の奮起を促し、熱烈な声援を送るもの、④味方の選手が、期待に応えた場合に、賞賛や感激の言葉を発するもの(野次として分類)、⑤味方選手の不甲斐なさを責めるもの、⑥中立的な立場にある審判に苦情を入れるものなどに分類できる。

つまり、野次は、別紙のように語義よりも幅広い意図で発せられていることが分る(表2において、主要な事例を一覧にしている。参照されたい)。

3-2 野次にみる大阪弁

上記のように、野次に使われる言葉には、罵詈雑言を主として、一般に怒鳴りつける言葉が多い関係から、決していい響きを持たない。しかし、愛嬌のある表現もある。たとえば、「ナカスゾ!」といった言葉には、ガキ大将が喧嘩の場面で、相手を威嚇する場合に発する言葉である。大のおとなが相手選手に対して、「オイ!ナカシタロカ!」と怒鳴っている姿は、ある意味、ほほえましいものがある。

また、野次る人のセンスに左右される部分がある。「I am happy」が、「エエゾ、エエゾ、ワイ am happy ヤ!」は、英語表現を関西風に振ったものであり、ユーモラスなところがある。「オマエ、ヤルヤナイカ。ヤッターマンやないか」は、劇画の主人公を語呂合わせで使っており面白い。

一方、野次る対象を見下げた表現で、肉体的な特徴や比喩を用いて怒鳴る姿は、聞いていても楽しくない。たとえば、「コラ!蛸」とか「オイ!禿げ」、「オイ!チビ」、「オイ!豚、ぶたまん」などがある。

なお、関東在住の人には、関西の球場において、野次を聞いていると、大阪弁の低俗なことに嫌気がさすという。しかし、一口に大阪弁といっても、幅広いものがあり、野次のような一端のみを捕らえて、全てを

評価するというわけには行かない。

大阪弁には、船場界限で話されてきた、歴史と伝統に支えられてきた言葉がある。そのなかには、京言葉の名残も多い。また、歌舞伎や浄瑠璃(たとえば、ゴンタは、義経千本桜の「いがみの権太」から用いられるようになったとされる)など上方の文化を受け継いだ言葉もみられる²⁵⁾。もともと大阪は商人の町として栄えた歴史があり、商いの言葉や朝の挨拶にも、独特のものが現存する(ドナイダ?儲かりマッカ?アキマヘンナ、マア、ボチボチデンナ。それはそうとナンカ、ボロクチオマヘンカ?等)。そこには庶民の生活力が感じられるし、人情味もある。直截的な表現よりも、ぼんやりとした曖昧さを残す言葉が現在も使われている(アホカイナ、アホヤナア、・・シテンカ、アンジョオシイヤ、カマヘンカマヘン、ワヤヤナアなど)。しまりのない表現は、見方を変えれば、ユーモラスでもある。

このほか、大阪弁には、言葉を短縮して表現するものがある。地名で日本橋一丁目を、日本一という。また、天神橋筋六丁目を天六という。「この道、まっすぐ行くと梅田に行きますか」とおじさんに尋ねると、「行きま」と答えるが、関東の人には行くのか行かないのか分からない。「行きます」とか「行きません」といえばはっきりする。同じような例では、「この商品もう一つありますか?」と店主に尋ねると、「おま」と返事が返ってきた。「おます」か「おません」なのか、関西人以外には分かりにくい。なお、関東でも言葉を短縮する例がある。しかし、関西での省略の仕方と異なるものがある。具体的には、ファスト・フード(fast food)の「マクドナルド」は、関東では「マック」であるが、関西では「マクド」という。このように、同じことを述べるのに、地域差がみられる言葉もある。地域差といえば、駐車場のことを、「モーター・プール」と称する事例がある。これなどは、関東では見ることができない。関西特有の使用例といえる。

このほか、短縮した表現として、そのことを実に単刀直入に伝える事例がある。動物園のトラとかライオンの檻の前には、「危険ですので、身を乗り出して顔や手を出さないでください」といった注意書きがあるのが普通と思われる。ところが、ある関西の動物園では、「かみます」とだけ書いた立て札が出されていた。実にストレートで分かりやすい表現と思われる。しかし、短縮した結果、誤解されやすい表現もある。関西の電車内で「指づめに注意!」とあるのは、乗車の際に、「自動扉に指を挟まない(つめない)ように注意

表2 プロ野球応援団の野次と大阪弁

試合の場面(分類記号)	その時の野次	大阪弁の意味
味方選手のエラーに対して・・・ ③と⑤	「オイ○○、 <u>アンジョウ</u> ウヤツタレヤ！ピッチャーが可愛そうやないか。後で、打って返しヤ！エエカ！」	上手くやれの意味。投手に迷惑かけたので、打って取り返せの意味。
外人選手への声援 ③	「××××！一発 <u>カマシ</u> タレ！」 一反応がない外人選手に対して、「お前、日本語分ットンノカ！ノンビリシテル場合ヤナイデエ！」	一本ヒット打ってくれの意味。
外人選手に対して・・・ ③	「ブンブンふるな。ブンブン丸は <u>アカン</u> 言ウタツトルヤロ！ <u>チョビ</u> でエエ、 <u>チョビ</u> で」	駄目の意味。チョッピーからチョビへ。小さくても確実に打ての意味。
ヒット打たれた味方投手に対して・・・③	「 <u>ドンマイ</u> 、 <u>ドンマイ</u> 。1本や2本カメヘン、カメヘン。今から気張っていきや、 <u>エエナア</u> 」	Don't mindのこと。構わないから、カメヘン、カメヘンへ変化。しつかりやれとのダメ押し。
救援投手の出来栄をみて・・・ ④	1球目ストライク「 <u>エエ</u> やん」独り言を言うようにつぶやく。 2球目ストライク「エエやないの」周囲に同意を求める風情。 3球目ストライク三振「エエがな！」形振り構わず絶叫。	ナイスピッチング 素晴らしい。
相手選手が隠し球を試みた際・・・ ①	「コラ××！ <u>ビビン</u> チョなことスナ！育ちが分かるやないか」	汚い手を使うなの意味。
味方選手がデッドボールを受けると・・・①	「コラ、 <u>ドアホ</u> 、 <u>何サラ</u> シトンネン。後でワイトコ来い！ <u>ボカボカ</u> ニ、 <u>ドツキマ</u> ワシタルヨツテニナ、 <u>覚え</u> テケヨ！」	ドは接頭語。サラスはスルの罵語。ボカボカと厳しく殴るの意味。マウスは強調語で回すのではない。
相手投手ノックアウトの場面で・・・ ①	「オイ、お前、ウチのバッターをなめとったんと <u>チャウカ</u> 。アホ、 <u>トット</u> トイニ <u>サラセ</u> 」ーベンチに引き下がる投手に対して、「 <u>螢の光</u> 、窓の <u>雪</u> や！」絶叫	甘く見るの意味。チャウカは違うかの問いかけの意味。早く引き下がれ。イヌは去るの意味。サラスは罵語。
凡打を続ける味方選手に対して・・・①と③	「コラお前、さっきから <u>スカ</u> ばかりやないか。こんな <u>安モン</u> のピッチャー、 <u>イテマエ</u> 、 <u>イテマエ</u> 」	失敗ばかりの意味。安物。この程度のピッチャーならヤツケロの意味。
相手選手のファウルボールに対して・・・①	「コラ、 <u>ドアホ</u> 。何処打ットンネン。 <u>ボケ</u> 、 <u>カス</u> 。前へ打タンカイ。選手が手空かして、待ットルヤナイカ。	ドはアホの罵語。ボケもカスも、同義語。
連続四球の味方投手に対して・・・ ③と⑤	「オイ、オイ、 <u>ドナイ</u> モコナイモナランやないか。家で嫁はんと喧嘩したんか。後で、 <u>ワイ</u> が <u>チャント</u> 言ウタルヨツテニ、 <u>気張</u> って投げヤ」	どうしようもないの意味。ワイは私。チャントは、いいようにとりなすの意味。
エラーした味方選手の打席に対して・・・ ③と⑤	「さっきの <u>チョンボ</u> 取り返せ！ここで一発 <u>シバ</u> イたれよ。そんなら男にシタルデエ。分ってるヤロナ」	チョンボは失敗するのマージャンことば。シバクは打つの意味。
敵の応援団の野次に対して・・・ ②	「オーイ、××の応援団さん、モウチョット上品に <u>デキマ</u> ヘンカ。分ランカッタラ、 <u>ワイ</u> ラが <u>教え</u> たる <u>ヨツテ</u> ニ」	ワイラは私たち。よってには、～してあげるからの意味。
ピンチヒッターに対して、ボール先行の投手に・・・ ③	「オイ、 <u>ビビル</u> な。 <u>上真</u> 中でエエからな。イヤやったら、 <u>ドテ</u> ッ腹に、 <u>カマシ</u> たってもエエぞ」	臆病になるな。ドやドテは罵語。カマスは、ぶつけるの意味。
審判の微妙な判定に対して・・・ ⑥	「○○さん、ボールやないか。何処に目ツイトンネン。 <u>キツリ</u> 見たってえな。 <u>アンジョ</u> オ頼ンマッセエ」	正しく見て欲しいの意味。よろしく頼みます。
ゼロが続く味方に対して・・・ ⑤	「こんな <u>坊主</u> ばかりで、どない思てるネン。神も仏も <u>オマツ</u> カイナ。○○さん、ワイラのこと <u>チョット</u> グライ考エテエナ」	ゼロが続き、神も仏もない。少しはファンのことも考えて欲しい。

注：特徴となる大阪弁に、アンダーラインを付し、場面に応じて、その意味を簡記した。

なお、分類番号は、①相手チームへの罵語、②相手に懇請、③味方への激励、④味方の活躍に感激、歓声、⑤不甲斐ない味方への愚痴、詰る言葉、⑥中立の審判への苦情を示す。

参考文献 牧村史陽編（1984）『大阪ことば事典』講談社学術文庫。

して下さい」の意味であるが、関東の人には、「指をつめているような、気をつけないといけない人がいるので注意してください」と解される例もある²⁶⁾。

ところで、罵語には低俗なものが多い（例えば、接頭語、接尾語を用いて、その現象を強調する言葉がある。ドアホ、・・してクサル、・・さらしてケツカルなど）。また、びろうな言葉などを用いて、例えとして使用する会話もある（クソ爺、クソガキや、頼りない人物について「尻みたいな奴」と揶揄する。また、要領を得ない話に、「風呂の中で尻こくような話をするな!」と意見する。未熟な若者に「尻の青い奴」と見下げる。このほか借金を払わずに夜逃げした人を「スカ尻カマシヤガッタ」などという。このほか「ションベン垂れ」など多い）。これらは、世間で、大阪弁は下品または低俗といわれる要因となる。野球の野次は、こうした言葉が多用されることから、人々のひんしゅくを買うことになる。

最近の大阪漫才がテレビで全国にいきわたり、関西の球団の応援風景が放映されると、大阪の言葉はこんなのかと一部に誤解される事になる。漫才は、大阪弁でも意図的に誇張した言い回しを用いることが多いことから、人々の笑いを誘う事になる²⁷⁾。野球の野次もたぶん似たところがある。野次は、大阪弁のうちでも罵語が特に頻繁に使われる事から、汚いとか品がないとみなされる。

しかし、田辺聖子氏は、大阪弁の魅力について軽妙自在に語る文化論を表しており、標準語を正当とする意見に異論を唱えているが、全く共感を覚える²⁸⁾。一般に、大阪弁はユーモアがあり、人情味がある。また、大阪弁には、活力のある庶民性が感じられ、逞しい生命力を秘めているといえる。

野次に用いられる大阪弁のように、ごく一面を捉えて「大阪弁は品がない」とか「汚い言葉」という感想があるけれども、大阪弁を総合的に把握した上での評価が望まれる。

なお、野次の中で、どのような大阪弁が用いられているのか、表3に整理した。罵語やこれと結び付けて発する野次に用いられる大阪弁などを、野次を発する理由や意図別に分類した。ただし、現実の野次を聞いてみると、かならずしも、正確に分類されているわけではなく、とんでもない場面で、分類した範囲を超えて、使用される事もある。表3における分類は、参考までに記したものである（品詞の分類や文法に基づく整理ではない）。

3-3 野次の意味するもの

応援は、プロ野球ファンが最良チームを支える組織的、公式の活動であるとするれば、野次は個々のファンの個人的かつ非公式の意思表示といえる。

こうした野次の実態を見ると、語義のごとく、相手選手を罵倒し、味方チームの試合を有利に運ぼうとするものばかりではないことが分かる。根底には味方チームの勝利を願い、ひたすら声援を送り続けるが、ことが順調に運ばない場面で、可愛さ余って憎さ百倍のファン心理が働くこともある。

試合の展開により発せられる野次の効用については、次のものが指摘されている。

- ① ドッと満場を沸かす愉快的野次は、周囲の雰囲気盛り上げる。また、応援団やファンの気持ちを、さらに高揚させる。
- ② 野次っている事から、日々の仕事のストレスから解放されて、存分に憂さ晴らしが出来る。
- ③ 応援団やファン仲間と親しくなり、野次により一層連帯意識が強いものとなる。
- ④ 応援をしながら、野次っていると、選手と一体になって戦う心境に成れる。このことは、ファン冥利に尽きる。
- ⑤ 野次により、その人が野球をどれほど知っているかが分かる。

しかし、一方において負の問題もある。これらを挙げると次のものがある。

- ① 大阪弁であることと関係なく、一般に野次言葉は汚い。とくに罵言は、怒鳴りつける言葉であるから、いい響きを持たない。熱烈なファンでなければ、興奮めする。
- ② 野次の内容そのものが、下品または低級なものがある。このことは、大阪弁全てが、そのようであると誤解してはならない。
- ③ 野次っている人は、自分の事しか考えていない。傍に婦人や子どもたちがいても、意に介しない。また、負け試合となると、味方選手や監督さえなじる事もある²⁹⁾。
- ④ 人権に触れる野次（たとえば、外人選手に対する野次のなかで奴隷、土人等の言葉で語るなど）については³⁰⁾、野球場側としても、細心の注意を払う必要がある。
- ⑤ 野球観戦が主なのか、酒盛りなのか、泥酔して分別がつかなくなり、何を野次っているのか分からなくなっている人がいる。

表3 野次に使われる大阪弁など

1. 野次に使われる罵詈雑言など	
・相手選手に対して (語る場合) . . .	あほ、どあほ、あほたれ、あほんだら、あほかいな、あほちゃうけ、あんぽんたん、すか、すかたん、あかんたれ、かす、ぼけ、ぼけなす、ひよつとこ*、けち、いね、いんでまえ、いにさらせ、なかつぞ
・味方選手に対して (激励) . . .	いてまえ、いてこませ、かちまわせ、(一発) かましたれ、(一発) たのんまっせ、しばいたれ、しばきあげたれ、けとばせ、どつきまわせ、いわしたれ、ドンマイ・ドンマイ*、きばれ、きばっていけ、びびるな、あたれあたれ* (死球を、こわがるなの意)、「チョンボ* (麻雀用語)」すなよ
2. 罵詈雑言と他の言葉を組み合わせた野次	
・相手選手をなじるもの . . .	何さらしてけつかんねん、お前何しに来てんねん、どの面さげて来とんねん、何処打つとんねん、あほしたらどつきまわすぞ、「ビビンチョ」すな、はよ引っ込め「蛍の光窓の雪」や、こら「でべそ」しっかりせい、下手すなよお前「パンツ」はいとんのかエエ!
・味方選手への激励 . . .	どてっばらに風穴あけたれ、どたまぼこぼこにいわしたれ、必死のパッチでいけ、耳の穴から手突っ込んで奥歯ガタガタイわしたれよ、鼻血も出るように負かしたれ、はよ樂さしてや
・味方選手の活躍に感激 . . .	ええがな、ありがとさーん、よう打った表彰状やると、ええやん日本一や、やるやないかお前、「ヤッターマン*」や、大きに大きに男前やぞ、わいam happy*やんけ
・敗戦濃厚のための願望 . . .	あんじょうたのんまっせ、あんじょうしたってや、ええ加減にしいや、もうちょっとどないかなりまへんか、もうこらえてえな、(逆上したファンに) あほすなよあほ、なんとかしたってえな、わやせんといてな、(負けて、これから一時間掛けて帰らなあかんのに) わいらのことちょっとは考えてえな
・諦めの境地 . . .	どないもこないもなりまへんわ、どんならん、どにこになりまへん、神も仏もありまへんわ、もうわやくちゃですわ、(あいつのお陰で) 「パー」になってしもたがな、こないあかなんだらしゃーおまへんな、坊主ばかりで元気でまっかいな、あほらしやの鐘が鳴るわ、わいを泣かすきか

注：*印は、大阪弁ではない。

試合の場面に応じて、こうした罵詈雑言や他の言葉との組み合わせで野次が飛ぶ。このなかには、大阪弁以外の言葉も混入する。多くは、うまく調和している。

応援団の活性化と野次は、日本のプロ野球の隆盛とともに、切っても切れない密接な関係にあるといえる³¹⁾。野球の観戦が、一層楽しいものにしていくためには、いい方向に伸ばすべきテーマと、改めるべきものがあり、関係者による努力が今後必要になる。

ところで、野球ファンには、野球が好きで、試合の内容をしっかりと味わいたいという人と、選手と一体となって戦いたいという気持ちから、応援に力を入れる人へと大別される。

したがって、球場での熱心な応援が、観客全てに受け入れられているかといえば、必ずしもそうではない。殊に、最近のドーム球場では、トランプットと応援の

手拍子と声援が、劈くような騒音となる。野球そのものを観戦したい人にとっては、騒音にしか聞こえない事もある。応援のスタイルも、自分たちのパフォーマンスに熱中しており、いわゆる「花見野球」そのものにみえる³²⁾。

日本の応援のスタイルは、米国の大リーグ・ファンの応援とは大きく相違している。米国では、地域性の問題があり、基本的に本拠地の球団ファンが球場を占める。

日本のように応援のリーダーはいない。ボールパークと呼んで、家族で球場に集い野球を楽しむ雰囲気がある。球場では、地元チームのプレーを楽しみ、敵味

方なくファイン・プレーには拍手を送り、スタンディング・オベーション (standing ovation) で選手を迎える。一方、緊張を欠いたプレーや致命的なエラーには、激しいブーイング (booing) を浴びせる事になる。球場全体が、不満の意を表すことから、当該選手は満座の中で恥をかく事になる。米国の球場では、野球のプレーそのものを (打球の音、捕球の音、スライディングの瞬間など) 確かめるような静寂と、すばらしいプレーへの歓声が、交互に繋がっていくような感覚を覚える。7回には、観客全員で「野球場に連れて行って³³⁾」を歌うのが、いまや恒例になっている。味方のチャンスともなれば、 Hammond・オルガンが鳴り響き、球場全体が大声援を送るが、リーダーがいなくても拘わらず、実にファンの統制が取れている。日本のように私設応援団のリーダーが、休みなく応援を促すのとは、大いに異なっている³⁴⁾。

このように、アメリカの大リーグが、熱心なファンを多数集めているにも拘らず、整然と野球を楽しむ様を見ると、お国柄や歴史の相違などでは済まされないものがある³⁵⁾。

日本のプロ野球関係者は、観客の増減が球団経営に重大な影響を及ぼす事から、応援を規制することについて、及び腰になっている。かつて、「応援倫理三原則」の通達により、自粛ルールを定めようとした経緯もあるが³⁶⁾、いつの間にか沙汰闇となり、今日に至っている。球団の経営は、チケットの販売、球場内物品販売、テレビ放映権、マーチャンダイジング (商品化権)、スポンサーシップの権利を、如何に拡大販売するかにかかっている³⁷⁾。このうち、観客の動員により、売り上げを伸ばすことのできるのは、チケットの販売と球場内物品販売である。このことから、観客の気分を損ねるような行動、たとえば、応援への規制などは極力避けるようになっていた。

このような状況の下で、2005年球団経営に参画した楽天が、期間営業利益で黒字を計上し、このことがパ・リーグ史上初の快挙となったことがある³⁸⁾。これまでは、各球団の経営は、親会社による赤字補てんが続けられてきたと言える (巨人、阪神、広島などは除く)。したがって、楽天の事例は、各球団にとって、経営の在り方や、独自の黒字化に向けての大きな刺激となった。さらに、楽天は、応援についても鳴り物の規制をかけており、思い切った試みが注目されている³⁹⁾。こうした新しい動きは、新規参入の球団だから出来るのか、他球団の動きも併せて見守ることになる。

ところで、阪神ファンの気質について、アンケートの結果が紹介されている⁴⁰⁾。指摘件数の多い順番で次のようになる。熱狂的、地元意識が強い、アンチ東京、目立ちたがり屋、言いたい放題、ストレス解消、判官びいきである。おそらく、かつて関西に所在した南海、阪急そして近鉄のファンにおいても、同様のことがいえたと思われる。良い悪いは別にして、こうした熱狂的ファンに対して、応援や野次の規制をかけることは、球団としても腰が引けることになる。

一方、ファンの側からみると、「応援に来て野次の一つも飛ばしてやろうと、憂さ晴らしに来るつもりが、あれこれ規制をかけられる事になれば、球場に来る意味がない」という。また、テレビの国会中継を見ていると、「国会議員のなかで、汚い野次が飛び交っている。これが放任されていて、もし、野球の応援や野次に規制をかけるという話はおかしい」という思いがけない意見もある。熱心なファンには、「応援や野次のあるべき方向やナンテ、滑った転んだの議論ヨウスルナア！ワイラにそんな理屈もへチマ (語呂合わせの言葉)⁴¹⁾もオマッカイナ！このチームが好きだけヤナイカ」と開き直る人もいる⁴²⁾。

いずれにしても、応援のスタイルと野次は、切っても切れない密接な関係にある。しかし、問題なのは何処までも放任しておいてよいのかという事に尽きる。とくに青少年や婦人のいる場所での、勝手気ままな野次について、自制を促す球団が出てきてもいいのではないかと考える。ファンのご機嫌を損なわないように、現在の状況をいつまでも放置していることにこそ問題がある⁴³⁾。

4. むすびにかえて

日本における野球の発展過程は、学生野球に端を発し、中等学校野球へと広がっていった。当初は、いわゆるエリートのスポーツとみなされていた。職業野球は、今日のプロ野球とは比べ物にならないほど人気のないスポーツであった。さらに、第二次大戦において戦争の拡大、激化とともに、野球そのものが禁止された時代があった。しかし、戦争終結後、野球が再開されて、野球の大衆化が一気に進んだといえる。この結果、学生野球に限らず、プロ野球が多くの観客を引き付けるようになってきた。

とくに、プロ野球は、一般大衆の憩いの場としての球場の役割があり、球場に集う熱心なファンの応援と、タイミングよく発せられる野次が、相乗効果をもたら

して、楽しい雰囲気醸し出している。

このようにプロ野球の発展した主要因は、①日本のプロ野球が強くなったこと、②日本独特の野球文化が、人々の生活に浸透してきたこと、③熱心な応援が、観客をプレーの流れに引き込むことなどが挙げられ、ファンは、思わずプレーに一喜一憂し、刹那的に野次を発する事になる。

本稿では、関西に所在する球場で、どのような野次が発せられているのか収録してみた。これらを分類してみると、語義よりもはるかに広い範囲・意図で、野次が発せられていることがわかる。つまり、熱烈なファンは、味方チームの勝利のためには、相手チームの選手を罵倒するだけでなく、時には、手心を加えてもらうべく哀願もする。一方において、味方チームや個々の選手を激励・応援するばかりでなく、敗戦が色濃くなってくると味方をなじることもある。さらに、中立の立場にある審判に対して、味方の利になるように懇願することも明らかになった。

また、そうした実態から、野次で使用されている大阪弁について、その意図や目的に沿って整理することができた。

ところで、野次に使われる大阪弁について、「大阪弁は下品だ」と決め付ける人がいる。しかし、それは、野次に使用される大阪弁のことであって、大阪弁すべてが、品が無いとは言えない。野次に使用される言葉は、多くは罵言とこれとともに発せられる言葉である。野次という特別な状態で、使用されることに理解が必要である。

なお、日本のプロ野球の応援や野次については、熱心さのあまり、自分たちだけが悦に入っているという風潮が、時として感じられる。また、単純なトランペットによる音楽と鳴り物の連鎖は、公共の場としての意識が欠如しているという指摘もある。また、ファンであるチームが勝利すればそれでよく、相手チームのファイン・プレーやホームランには関心がない。いわゆる、スポーツマンシップが欠如しているといわれる。かつての応援倫理三原則も、基本的に守られていないし、飲んで騒ぐ花見野球と批判される状況から、変化は見られない。

こうした観点から、楽しくて健康な球場の環境をつくるためには、球団、球場、応援団などが事態を直視し、あるべき方向へ導いていく努力が必要である。トラン

ペットやカネ・太鼓といった騒々しい応援スタイルもさることながら、野次についていえば、たとえば、①野次は何を言っても良いという風潮を改める（あまりにも品の無い野次が飛び交うことがある。球場や応援団による地道な雰囲気作りや、環境整備が期待される。たとえば、ポスター、場内放送の活用など）、②人権にかかわる発言には十分に注意する（野次の発言者に対して、観衆のなかで、その責任を注意していくことは困難であるが、是正していく雰囲気作りが必要）、③婦人・子供がいることに配慮する（親が幼い子供を連れて、一緒に騒いでいるケースは論外として、安心して観戦できる家族応援ゾーンの設置などが必要）、④自分が何を野次っているのか分からないほど酩酊している人がいる（営業のためなら、いくらでも酒類を販売することに対して、抑制ルールが必要）等への対応が求められよう。こうした対応の結果、野球場が、ファンはもちろんのこと、家族揃って楽しめる憩いの場になっていくことが望まれる。

追 記

本稿は、沢田邦昭（元阪神タイガース球団代表）、永松勝文（元東海銀行事務管理部次長兼システム開発部次長）、小石正夫（元大阪厚生信用金庫常務理事）、伊藤暢朗（豊九会会長）、野畑康（元ダイヘン環境管理部長）、山下博之（郷土史研究家）、森隆太（大阪大学硬式野球部OB会事務局長）、遠藤加寿子（新生銀行法務・コンプライアンス統轄部 金融情報管理室 室長代理）、長岡智寿子（法政大学非常勤講師）、興石健太郎（文京区立第六中学校）の各氏より助言を得た。ここに記して謝す。なお、残る誤りは筆者の責に帰するものである。

注

1 明治6年東京帝国大学の前身である開成校において、教師ウィルソンおよびコチェット氏より、野球が学生に伝えられた。国民新聞社運動部編¹⁾p.3-4 参照。脇村春夫²⁾によれば、米人教師(Horace Willson)が一高の前身である第一番中学校で、明治5年から野球を教えていたと記している。なお、Willsonは、2002年日本の野球殿堂入りしている。

また、東京芝の開拓史仮学校（後の札幌農学校、北海道大学）で米人教師アルバート・ベーツが、本国から野球道具を持ち込み、学生に教えたことも伝えられている。北野高等学校野球部年史³⁾p.18 参照。

2 近代化を進めるために、早期に欧米の文化や技術を導入することが求められた。そのため、学校教育では、アメリカ人、技術の導入では、イギリス人が各方面から雇われる事になった。この雇い先は、政府、府県、民間と、三つのグループがあった。学校では高等専門学校での英語教師や、ミッション・スクールでの宣教師がある。梅溪⁴⁾p.135-143 参照。

3 明治28年5月、横浜外人団と一高との試合が行われ、29対4で一高が大勝している。国民新聞社運動部編¹⁾p.119-123 参照。なお、このときのグラウンドは、現在の横浜球場周辺であったと聞いている（かつて、横浜球場で開催された、国立7大学OB野球大会開会式において、当時の同球場役員の挨拶があり、一高対横浜外人団との試合が、この球場近辺で行われた旨、紹介があった）。

また、明治4年鉄道局の平岡技師が汽車製造技術の研究で渡米し、同6年の帰国に際し、バットとボールを持ち帰った。これを機に、新橋アスレティック・クラブという日本初の野球チームが誕生している。これは一高より15年前とされる。赤瀬川⁵⁾p.178 参照。4 早慶戦の始まりは、明治36年(1903年)である。11対9で慶応が勝利した。しかし、両校の応援が過熱するなか、1906年より中止されることになり、再開まで20年の歳月を要する事になった。早稲田大学大学史資料センター、慶応義塾福澤研究センター共編⁶⁾p.14-16 参照。

5 全国中等学校優勝野球大会は、大正4年(1915年)第1回が豊中球場(阪急豊中駅西500メートル)、第3回から鳴尾球場、第10回より甲子園球場が会場になっている。現在の名称は、全国高等学校野球選手権大会である。なお、大正13年(1924年)選抜中等学校野球大会が、名古屋の山本球場で開催された。翌年から、甲子園に移っている。現在の名称は、選抜高等学校野球大会である。山室寛之⁷⁾p.4-6 参照。

なお、甲子園球場は、阪神電鉄により、大正13年8月に建設された。当時としては、わが国最初の近代的球場であり、その年の干支が甲子であったことから、甲子園と名づけられた。因みに、神宮球場は大正15年10月に完成している。玉置通夫⁸⁾p.27,35 参照。

6 昭和11年2月、日本職業野球連盟が結成された。全日本を母体とする後の「東京巨人軍」をはじめ、「大阪タイガース」「名古屋軍」「東京セネターズ」「阪急」「大東京」「名古屋金鯱」が次々に生まれた。山室寛之⁷⁾p.161-163 参照。

7 第二次大戦により、野球が世の中から抹殺された

が、これは国内だけではなく。バンクーバーにあった日本人クラブチーム朝日の活躍は、当時の移民した日本人や日系二世の人々の誇りであり、希望の灯であった。しかし、真珠湾攻撃により始まった大戦により、チームは解散させられて、日系人はすべて強制的に捕虜収容所に送られた。この時代、日系人は仕事、財産、家、土地を失い、強制労働の明け暮れとなった。終戦後、チームの復活はならなかったが、60年を経て、カナダ政府は、バンクーバー朝日の野球殿堂入りを決めた。後藤紀夫⁹⁾は、時代の流れに翻弄されながら逞しく生きたバンクーバー朝日と現地の日本人のことを浮き彫りにしている名著である。

8 日本人歌手では、笈田敏夫、旗輝夫、ナンシー梅木が活躍した。ペギー葉山、江利チエミも、ジャズ歌手として歌っていた。演奏では、南里文雄、菌田憲一のほか、白木秀雄や藤家虹二などが得意の分野で活躍した。また、ビッグ・バンドで見砂直照と東京キューバン・ボーイズや原信夫とシャープ&フラッツが人気を博した。

9 ジミー時田が、日本人としてカントリー・ウェスタンを歌っていた。

10 ハワイアンは、バックキー白方、大橋節夫、山口銀次、ポス宮崎が活躍した。

11 阿久悠¹¹⁾には、厳しい戦争の傷跡を背負った戦中派と、自由を履き違えた軽薄な若者たちのなかで、逞しく生きる子どもたちの風景が描かれている。このなかで、淡路島における進駐軍の野球チームと小学生の野球チームとの親善試合の様子が語られている。物資のない時代にも拘らず、のびのびとした少年たちの姿が印象に残る。

12 1943年の晩秋、戦地に赴く学生のために、最後の思い出となるかもしれない早慶戦を行い、戦場に送り出した。この試合を「最後の早慶戦」と呼んでいる。早稲田大学大学史資料センター、慶応義塾福澤研究センター共編「1943年晩秋 最後の早慶戦」⁶⁾を参照されたい。

また、全国中等学校優勝野球大会も昭和16年に中止となり、翌年昭和17年には、文部省による「大日本学徒体育振興大会」の一部門として、野球が行われた。この大会は、「幻の甲子園」と後に呼ばれる事になった。早坂隆¹²⁾p.19-28 参照。

13 [http://baseball-freak.com/audience/\(2012.9.25\)](http://baseball-freak.com/audience/(2012.9.25))

14 大阪弁について、語義、語源、時代による解釈、言葉の使われ方、文法からみた分析など牧村史陽編¹³⁾を参考にした。

15 大阪弁に関して、特性、意味、醸し出す雰囲気など絶妙な捉え方をしている田辺聖子¹⁴⁾¹⁵⁾を参考にした。また、大谷晃一¹⁶⁾¹⁷⁾では、大阪人の分析を基にした大阪弁の使われ方や、生活を通してどのように語られているのか、興味深い事例を参考にした。尾上圭介¹⁸⁾も大阪弁について、鋭い分析と調査による結果を明快に表現しており、参考にした。

16 昭和9年ベーブ・ルースやルー・ゲーリッグなどが、二度目の来日を果たし、全日本軍と15試合戦った。全日本軍は全敗した。ただし、17歳の澤村栄治投手が、ゲーリッグの本塁打による1点に抑える好投を演じたことが唯一の救いであったとされる。山室寛之⁷⁾p.161 参照。なお、プロ野球の最優秀投手に送られる澤村賞は、同投手を記念して贈られる事になったものである。同投手は、第二次大戦で戦死した。

17 1949年サンフランシスコ・シールズ軍が来日して、全日本軍と戦っている。このときも、7戦全敗で日本軍は歯が立たなかった。このチームは、大リーグではなく、3Aに所属するチームであった。

18 正岡子規は、松山中学から予備門に入り、さらに第一高等中学に進んで、野球に熱心に取り組んだ。子規は、ベースボールを歌にしているが、幼名が升(のぼる)であったことから、「能球」、「野球」を「のボール」と読ませて、雅号につけている。また、打者、走者、死球、飛球などと翻訳した。伊集院静¹⁹⁾p.388 参照。一方、第一高等学校の中馬庚は、野球と訳したともいわれている。国民新聞運動部編¹⁾p.42 参照。

19 太平洋戦争中、野球用語が全て日本語に代えられた。

審判用語としては、左記の用語を、右記の日本語に呼びかえる事になった。

①ストライク・・・よし一本、よし二本、②三振アウト・・・よし、それまで、③ボール・・・1つ、2つ、3つ、④四死球・・・一塁へ、⑤ヒット・・・よし、⑥ファウル・・・だめ、⑦セーフ・・・よし、⑧アウト・・・ひけ、⑨ボール・・・反則、⑩インフィールドフライ・・・内野飛球。規則用語としては、下記のごとく野球用語を括弧書きの日本語に呼びかえる事になった。

ストライク(正球)、ボール(悪球)、ヒット(正打)、ファウル(圏外)、セーフ(安全)、アウト(無為)、ファウル・チップ(擦打)、バント・ヒット(軽打)、スクイズ・プレー(走軽打)、ヒット・エンド・ラン(走打)、ホーム・イン(生還)、タイム(停止)、フォース・アウト(封殺)、インターフェア(妨害)、スチール(奪還)、リーグ戦(総当たり戦)、コーチ(監督)、コー

チャー(助令)、マネージャー(幹事)、アード・ラン(自責点)、チーム(球団)、ホーム・チーム(迎撃組)、ビジター・チーム(往戦組)、グラブ、ミット(手袋)、フェア・グラウンド(正打区域)、ファウル・グラウンド(圏外区域)、ファウル・ライン(境界線)、スリー・フット・ライン(三尺線)、プレーヤーズ・ライン(競技者線)、コーチャーズ・ボックス(助令区域)。

上記については、大阪大学硬式野球部創部100周年記念誌「求心」²⁰⁾p.59-61(堀馨氏の原稿より編集)参照。

また、用語だけでなく、ユニホームのローマ字も使用禁止となり、幻の甲子園といわれる、文部省主催の野球大会では、胸に日本語を使用したユニホームを着用した。早坂隆¹²⁾p.125 参照。

20 林新²¹⁾など多数の書がある。この中で異色と言える作品がある。北原遼三郎²²⁾は、過去に完全試合を達成した十五名のヒーローのその後を追跡した貴重な記録である。一方、門田隆将²³⁾は、プロ野球界の名コーチとして有名であった主人公が、突如教員資格を取得して、高校の教師として甲子園を目指そうとした。しかし、非情にも病に倒れ世を去った経緯を記録している。両書は、主題に関する詳細な記録とともに、プロ野球の発展過程についても、理解が得られる良著といえる。

21 たとえば、吉川潮²⁴⁾は、野球選手が経験する、多様な人生の様相を伝えている。そのことが、プレーのなかでの一コマ一コマに例えて表現されている。読者も、なんとなく思い当たる場面がある筈であろう。また、堂上瞬一²⁵⁾は、主人公が斜陽の社会人野球部にスカウトされて、これを愚直にも立て直そうとする。バラバラになったチームを如何にまとめていくかを問う、読み応えのある青春物語といえる。

22 ここでは、直木賞受賞作家の野球を題材にした小説を、以下にあげておく。

井上ひさし²⁶⁾、赤瀬川隼⁵⁾、重松清²⁷⁾、伊集院静²⁸⁾、半村良²⁹⁾などがある。

23 神吉拓郎³⁰⁾、秋吉光一³¹⁾や室積光³²⁾が挙げられる。このなかで、秋吉の作品は、スポーツ・ドキュメントとして、野球の試合については触れずに、過去に草野球を楽しんだ仲間を再び訪ねて、その後の彼の人生や、生活の葛藤を、生き活きと描いている。草野球を楽しむ仲間に、喜びと生きがいを伝えている。

24 金贄汀³³⁾は、1981年に甲子園で活躍した在日高校野球選手たちの、青春とその後を描いた感動のドキュメントである。田澤拓也³⁴⁾は、伝説の決勝戦と

言われている三沢高校と松山商業高校との、延長十八回の戦いについて再現し、当時の監督や選手たちのインタビューにより、足跡を辿っている。読み応えのある力作である。矢崎良一³⁵⁾は、甲子園で活躍したヒーローたちと、彼らと戦った相手校選手たちのその後を追跡したドキュメントである。中村計³⁶⁾は、最近では稀になった公立学校の優勝校である佐賀北高校について、ドラマのような逆転劇を、詳細に語っている。早坂隆¹²⁾は、昭和17年に行われたいわゆる「幻の甲子園」について、全試合の内容を語り、活躍した選手たちの戦後を追跡している。戦場に消えた選手も多く、生き残った元選手たちの思い出は、読者の胸を打つ。山際淳司³⁷⁾は、甲子園を目指した進学校の予選を勝ち抜いていく過程を、取り上げた短編であるが、印象に残る作品である。このように、枚挙に暇がないほど、多数の書がある。

25 牧村史陽編¹³⁾p.275を参照した。

26 この2例は、尾上圭介¹⁸⁾p.70-75を参照し紹介した。

27 大谷晃一¹⁶⁾p.85-100を参照されたい。

一方、落語について論じた秀作に、桂蝶六³⁸⁾p.92-102があり参照されたい。ここでは漫才とは異なり、落語は江戸時代から伝わる伝承芸である。単に、笑わせるのが目的ではなく、後味の良さや、笑いの質が大事にされる。人間の業を肯定するという視点から、受容といやしの眼差しが備わっていることが求められる。こうしたところが、人々に受入れられている所以であろう。漫才との対比が理解できる。

28 田辺聖子¹⁴⁾を参照されたい。本書において、同氏は大阪弁のことを、暖かくかつ愛情を持って、その雰囲気伝えていく。また、大阪弁が庶民文化の活力であり、生命力を秘めているとも述べている。また、田辺聖子¹⁵⁾p.155-159でも、大阪のことばが論じられている。このなかで、大阪弁の語尾がどのように用いられているか、面白く触れられている。

29 正規の応援団員は、味方に対する野次は禁じられている(国定浩一³⁹⁾p.63参照)。したがって、味方を野次っているファンは、正規の応援団員でないことになる。熱烈なファンではあるが、偶に球場に来て、憂さ晴らしをしているものかと思われる。

30 黒人選手に対して、「オイ！オマエの先祖は土人(または奴隷)ヤッターヤゾ！分っとるやろナ！アンマリ、イチビルナヨ！エエナ」などと野次ることがある。しかし、野球の本場アメリカにおいても次のような事例が紹介されている。ニューヨーク・ヤンキースのホーム球場で、売店で後に並んでいる白人に対して、次々

と注文を聞き、日本人女性が、後回しにされた事例である。このことが明らかになり、球場側が謝ったとされているが、こうした差別事例は、米国では依然と残っている(向井万起男⁴⁰⁾p.70-71.参照)。

31 かつてのパ・リーグでは、閑古鳥が鳴くような状況であったが、元阪急や元南海の熱烈なファンが、毎日のごとくスタンドに来て、孤立無援で野次っていた。現在では、観客が増加して、野次るファンが増加した。

32 「ドーム球場の応援は、野球の観戦者にとって、騒音でしかない」と豊田泰光氏は自著の中で述べている。豊田泰光⁴¹⁾p.14参照。また、マリオン・ロバートソン⁴²⁾p.155-162において、日本のプロ野球の応援について、厳しく批判している。騒音型の応援は、好きな球団や選手を応援するよりも、自分たちのパフォーマンスに熱中しており、いわゆる「花見野球」そのものにみえる。日本野球とファンの一大欠点と指摘している。

このほか、日本経済新聞運動部編⁴³⁾p.184-189においても、日本のプロ野球の応援について、そのあり方を述べている。プレーよりも大人数で大声を張り上げて、雰囲気を楽しむのが応援の日本的スタイルであるとしている。公共の空間であることから、あるべき姿についても、意見を述べている。

参考になるのは、池井優ほか⁴⁴⁾p.178-179において、アメリカの応援風景について伝えられている。ボールパークに家族揃って応援に行く風景は、日本の応援とは異質である。

また、ロバート・ホワイティング⁴⁵⁾p.131には、日本のプロ野球の改善策の一つとして、応援を静かにさせることが指摘されている。こうした意見を述べる人が増えている。

33 1908年ボードビリアンのジャック・ノーホースの作詞、友人ティルツァーの作曲により、全米のヒット・ソングになったもの。「Take me out to the ball game」は、7回表終了後、体を解す際に、歌われる。これを「セブンス・イニング・ストレッチ」と呼ばれている。宇佐見陽⁴⁶⁾p.52-53参照。

なお、歌詞の原文は以下のとおり(CD“BASEBALL” by ELEKTRA ENTERTAMENT)。

Take me out to the ball game

Take me out with the crowd

Buy me some peanuts and Cracker Jack

I don't care if I ever get back

Let me root, root root for the home team,

If they don't win it's a shame:

For it's one, two, three strikes you're out
At the old ball game.

34 日本経済新聞朝刊平成 24 年 8 月 20 日の選球眼(島田健)によれば、マリナーズのセーフコフィールドにおいて、観客動員の長期低迷を解決するため、ヘルナンデス投手が登板する日に「キングスコート」と称して、普段空席の多いシートの割引や T シャツの配布などを行い、観客の動員を図っているとのことである。応援の仕方が、一体感のある日本の応援に似ている。

35 佐山和夫⁴⁷⁾によれば、米国のベースボールと日本の野球について、貴重な指摘がなされている。米国のベースボールは、タウンボールに端を発する草野球から次第にルール化されて、今日の大リーグに至る「下」から「上」に成長・発展していった。日本は旧一高をはじめ旧制高等専門学校において、野球が取り込まれて、その後旧制中等学校などに普及していった。つまり「上」から「下」へと普及・拡大した。このほか、米国の打撃第一とする考え方と、日本の守備を重要視する考え方が対比できる。また、野球の取り入れ過程から、日本では、精神的なものを追求する「野球道」が重んじられた。米国の楽しむものとする考え方と対極にある。米国のように多民族国家では、人々の気持ちをまとめる意味で、ベースボールは重要な役割を果たしたとされる。

36 1984 年当時のコミッショナー故下田武三氏は、「応援倫理三原則」を傳達している。全てのファンが楽しめるように、次のことを守ろうというものである。

- ① 他人に応援を強要しない。
- ② 他人の耳をつんざくカネや太鼓を鳴らさない。
- ③ 他人の目を覆う大きな旗やのぼりを振らない。

現在の応援では、守られていないと思われる。

これについて、豊田泰光⁴¹⁾p.125-128 を参照されたい。また、マリオン・ロバートソン⁴²⁾p.156 によれば、日本のプロ野球の応援は、野球のプレーを楽しむには、縁遠いものがある。トランペットや応援団の声援がうるさく、観戦に不向きであるとのべている。

37 大坪正則⁴⁸⁾p.139-152 を参照されたい。球団の経営について、示唆を与えている。

38 ロバート・ホワイティング⁴⁵⁾p.82 参照。

39 球団によって、応援のあり方について、具体的にルールを決めるところが出てきた。楽天ゴールデン・イーグルスの応援規定では、ホーム・ゲームの宮城球場において、トランペットや笛の使用を禁じている。ただし、公認の私設応援団のみ、太鼓一個の使用は認められている。他球場では、この限りではない(楽天

ゴールデン・イーグルス Wikipedia ホームページを参照されたい。2013.02.9 検索)。

40 大谷晃一¹⁷⁾p.20-28 を参照した。

41 「へちま」の皮は、何の役にも立たないことから、値打ちのないもの、つまらぬもの、意に介するに足らぬものなどの意に用いた。現在は、「へちま」だけで同意に用いる。牧村史陽¹³⁾p.625-626. 参照。

42 どうしてその球団のファンになったかは、各人区々である。北杜夫⁴⁹⁾p.242-243 の場合、戦後プロ野球の再開されたときに、阪神のダイナマイト打線が、かつての旧制高等学校のバーバリズムに通じたからと述べている。誠に興味深い感想である。各人の生活経験やささやかな契機から、ファンになることが多い。

一方、学生野球になると、当該校の学生であるとともに、母校の応援という明確な目的がある。応援団に所属するかどうかは個人の意思に関わるが、自己犠牲のもとで、母校の名誉のためにひたすら打ち込む姿は、見ている人の気持ちを熱くすることもある。しかし、これを馬鹿げていると取る人もいるはずである。最相葉月(2003)り、読み応えのある物語になっている。参考にされたい。

43 現在のプロ野球では、飛ばないボールの影響かもしれないが、観客が減少している。また、選手の報酬、トレード、育成など多くの問題を抱えており、球団の経営は厳しいものがある。こうした経営の実情を、総合的に指摘している清武英利⁵¹⁾があり、参照されたい。

文 献

- 1) 国民新聞運動部編『日本野球史』2000 ミュージアム図書
- 2) 脇村春夫「日本の学生野球の今昔」2003 学習院大学経済学部講演要旨
- 3) 大阪府立北野高等学校野球部年史編集委員会編『北野高等学校野球部年史』2003 岡印刷
- 4) 梅溪昇『たいまつ火』1998 なにわ塾叢書
- 5) 赤瀬川隼『白球残映』1995 文芸春秋
- 6) 早稲田大学大学史資料センター、慶応義塾福澤研究センター共編『1943年晩秋最後の早慶戦』2008 教育評論社
- 7) 山室寛之『野球と戦争』2010 中公新書
- 8) 玉置通夫『甲子園球場物語』2004 文春新書
- 9) 後藤紀夫『バンクーバー朝日物語』2010 岩波書店

- 10) 山室寛之『プロ野球復興史』2012 中公新書
- 11) 阿久悠『瀬戸内少年野球団』1979 文春文庫
- 12) 早坂隆『幻の甲子園』2012 文春文庫
- 13) 牧村史陽編『大阪ことば事典』1984 講談社学術文庫
- 14) 田辺聖子『大阪弁ちゃらんぼらん』1978 筑摩書房
- 15) 田辺聖子『性分でんねん』1993 ちくま文庫
- 16) 大谷晃一『大阪学』1997-a 新潮文庫
- 17) 大谷晃一『続 大阪学』1997-b 新潮文庫
- 18) 尾上圭介『大阪ことば学』2010 岩波書店
- 19) 伊集院静『ヒデキ君に教わったこと』2007-a 講談社文庫
- 20) 大阪大学硬式野球部 OB 会『大阪大学硬式野球部創部100周年記念誌「求心」』2007 住金フソウビジネス(株)
- 21) 林新『よみがえる熱球—プロ野球70年』2005 集英社新書
- 22) 北原遼三郎『完全試合』1994 東京書籍
- 23) 門田隆将『甲子園への遺言』2005 講談社
- 24) 吉川潮『人生劇場 二死満塁』1993 廣済堂
- 25) 堂場瞬一『いつか白球は海へ』2004 集英社
- 26) 井上ひさし『ナイン』1990 講談社文庫
- 27) 重松清『半パン・デイズ』2002 講談社文庫
- 28) 伊集院静『ぼくのボールが君に届けば』2007-b 講談社文庫
- 29) 半村良『僕らの青春 下町高校野球部物語』2010 河出書房新社
- 30) 神吉拓郎『みんな野球が好きだった』1994 PHP 研究所
- 31) 秋吉光一『されど草野球』2006 角川書店
- 32) 室積光『記念試合』2007 小学館
- 33) 金賛汀『甲子園の異邦人』1988 講談社文庫
- 34) 田澤拓也『「延長十八回」終わらず』1994 文芸春秋
- 35) 矢崎良一主筆『怪物たちの世代』2004 竹書房
- 36) 中村計『佐賀北の夏』2011 新潮文庫
- 37) 山際淳司『スローカーブを、もう一球』1985 角川文庫
- 38) 桂蝶六「落語の眼差し—人間をどう見るか—」
大阪青山大学紀要、2008,1,91-102
- 39) 国定浩一『阪神ファンの底力』2011 新潮文庫
- 40) 向井万起男『米国の光と影と、どうでもイイ話』
2012 朝日新聞出版
- 41) 豊田泰光『プロ野球を殺すのはだれだ』2009 ベー
スボール・マガジン社新書
- 42) マリヨン・ロバートソン『甦れ、愛しの日本野球』
2007 ファーストプレス
- 43) 日本経済新聞運動部編『プロ野球よ!』2003 日
経ビジネス人文庫
- 44) 池井優、アメリカ野球愛好会『熱闘!大リーグ観
戦事典』2001 宝島社新書
- 45) ロバート・ホワイティング著、松井みどり訳『野
球の未来がここにある』2006 ちくまプリマー新
書
- 46) 宇佐見陽『野球神よ、大リーグ球場に集え』2007
洋泉社
- 47) 佐山和夫『ベースボールと日本野球』1998 中公
新書
- 48) 大坪正則『パ・リーグがプロ野球を変える』2011
朝日新聞出版
- 49) 北杜夫『マンボウ阪神狂時代』2006 新潮文庫
- 50) 最相葉月『東京大学応援部物語』2007 新潮文庫
- 51) 清武英利『巨魁』2012 ワック(株)